

コミュニケーション・スキルの訓練プログラムを応用した上級日本語授業

横溝 紳一郎

要 旨

2009 年秋の上級日本語授業において、「親業／教師学」を適用した「上級日本語：人間関係構築のためのコミュニケーション」を開講した。授業は留学生と日本人学生が混在する環境下で進められた。学期末に提出されたレポートの内容から、「留学生と日本人では、困難に感じる場所に相違点がみられること」「日本語力の不足が原因で、困難を覚える留学生がいること（例えば、終助詞の使用法）」「日本人とはうまく使えるが、同国人同士では使いにくく感じる留学生がいること」など、興味深いデータが得られた。それとともに、「授業中の教師の助言の仕方」「教科書の活用方法」「受講生の減少への対処法」に関して、改善策を講じる必要があることが明らかになった。

【キーワード】 上級日本語授業 コミュニケーション・スキル 親業 教師学

1. はじめに

2009 年秋の佐賀大学日本語カリキュラムの全面改定に伴い、本稿の筆者は上級日本語の授業ならびにコーディネーターを担当することになった。いろいろ考えた結果、筆者自身がこの数年研修を受けている「親業／教師学」の内容を日本語学習者に適用し、授業をデザイン・運営することになった。本稿は、その授業の実践報告である。

2. 親業／教師学とは？

2.1 親業／教師学と本稿の筆者との関わり

親業／教師学とは、「カウンセリングの神様」と呼ばれたカール・ロジャーズの教え子であったトマス・ゴードン氏が始めた、コミュニケーション・スキルの訓練プログラムのことである。親のためのプログラムを「親業（おやぎょう：P.E.T.= Parent Effectiveness Trainig）」といい、1960 年初めに米国カリフォルニア州で始められた。その成功を受け、数年後に教師のために始められたのが、「教師学（T.E.T.= Teacher Effectiveness Trainig）」である。親業の日本への上陸は 1977 年であり、1980 年に「親業訓練協会」(<http://www.oyagyo.or.jp/>) が

設立され、1985年には、教師学の訓練プログラム（講座）が開始された。現在は、世界中の多くの国でP.E.T.とT.E.T.の講座が実施されており、日本では、親業講座、教師学講座に加えて、「自己実現のための人間関係講座」「看護ふれあい学講座」「ユース・コミュニケーション講座」などが実施されている（ゴードン 1990、諸富 1997、久保 2005、土岐 2006）。

本稿の筆者と親業／教師学との出会いは、1980年代半ばに遡る。当時ハワイ大学大学院生であった筆者が履修した授業の中に、「日本語教育法（教育心理学）」という授業があり、担当教員は吉川宗男教授（現ハワイ大学名誉教授・NPO 法人国際メンターシップ協会名誉会長）であった。学期中に吉川教授の授業の中で取り上げられた項目の中にT.E.T.があり、週末の宿題として本一冊（366 ページ！）を読んでもらうようにという指示が出された。その量に最初は圧倒されたのであるが、読み始めると、面白くて止まらなくなってしまった。その後のことについてまとめたのが、以下の横溝（1997）である。

私の一冊

横溝紳一郎先生が選んだ

T.E.T.教師学 効果的な教師＝生徒関係の確立

日本語の授業が行われる教室は、教師と学習者が出会い、日本語学習という目標実現に向けて、お互いの立場で協力する場であると私は考えています。物の見方・価値観が異なる人間が共同作業を行うのですから、いつもうまく協力態勢ができるとは限りませんし、複数の学習者がいる通常の教室内では、なおさらその成立が難しくなります。

ここで、どのようにして教室内の協力態勢をつくり上げるか、すなわちクラスルーム運営が、教師にとって大きな問題となります。よい学習環境ができ上がっていれば学習効果があがることは、いろいろな外国語教授法（例えばCommunity Language Learning）で主張されていることですが、教師と学習者の学習協力態勢をどのようににつくり上げることができるのかについての具体的な方法に関しては、外国語教授法の分野ではあまり取り上げられていないようです。

ハワイ大学大学院に留学している間、いろいろな先

生方の授業を見学したり、金八先生と生徒とのインターアクションをビデオを使って分析したりして、学習協力態勢のつくり方を研究していた私が、教授法のセ

ミナーを履修した際に出合ったのが『T.E.T. 教師学 効果的な教師＝生徒関係の確立』です。その後、今までずっと、クラスルーム運営に関する私の方針として機能しています。

教室内で起こる問題とその対処法に関する具体的な例および説明が満載の同書は、教師と学習者にそれぞれの役割について熟考する機会を、いろいろな形で提供してくれます。私は学期が始まる前には必ず、読んでから初日の授業に臨み、学習者とのよりよい協力態勢をつくるように努めています。

姉妹書『P.E.T. 親に自信を与える親業 新しい親子関係の創造』（サイマル出版会）とともに、皆様にぜひ一読をお勧めいたします。

◎〔よこみぞ しんいちろう〕－南山大学外国人留学生別科講師／日本語教授法



トマス・ゴードン 著
奥沢良雄・市川千秋・
近藤千恵 共訳
小学館
2,796円

このような形で、本稿の筆者は、教師学をクラスルーム運営の方針とし続けてきた。この状態に変化が起きたのが、『オンラインによる教師教育者研修：海外日本語教育実習担当者を対象として』（平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 18520411)の研究代表者を務めていた 2006 年秋のことだった。同プロジェクトは、その一つの目標として「メンターの育成」を掲げていた。筆者自身がメンターの育成に携わったのはこれが初めてではなく、(1) 日本語教育学会主催のオンライン教師研修(日本語教育学会教師研修委員会編 2004)、(2) 日本語教育実習生対象のメンター育成コース(横溝他 2006)、(3) 『オンラインによる日本語教師教育者研修に関する総合的研究』(平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金萌芽研究 課題番号 16652038)(横溝他 2009)等で、メンター育成の具体的方法の探究には既に着手していた。しかしながら、2006 年の秋に、本稿の筆者は「メンターとしての自分自身」に、そして「メンターを育成する者としての自分自身」に、大きな疑問を持ち始めることとなった。その頃、『オンラインによる教師教育者研修：海外日本語教育実習担当者を対象として』の研究協力者 5 名に、以下のようなエッセイをメール配信している。¹

教師教育者としてのメンターに注目して、その育成に力を注いでいる私であるが、果たして自分自身が「一人前のメンター」なのか、という点については、いまだ大きな疑問符が付きまとう。…

メンターとして、そしてメンター育成者としての自分に自信が持てなくなった筆者は、その後、「教師学一般講座(2006 年 12 月)」「教師学基礎講座(保育編)(2007 年 8 月)」「親業一般講座(2007 年 8 月)」にまずは参加し、一人前のメンターとなることをめざし始めた。ここに至って、それまで「知識」としては頭に入っていた(つमり)の親業/教師学の、自分で実際に運用できる「能力」の獲得をめざす段階に入ったのである。講座に参加してみると、「知っているはずなのに、できない」ことばかりであった。インストラクターの助言を受けていても、何度も何度も失敗してしまう。そのうちに、少しはできるよう感じになるのであるが、しばらくすると、またできなくなる、こういったプロセスの繰り返しであった。自分の能力の低さに失望しながらも、何とかこの体験を自分自身に活かしたいという気持ちで、講座への積極的参加を継続して行った。その結果、親業/教師学で得た体験と、メンター育成のポイントとが、少しずつではあるが筆者の中でつながり始めた。そのことについて筆者は、上掲の 5 名に、以下のようにメール配信している。

〔教師学での学びとメンター育成との関係〕

メンターの役割（情報提供・傾聴・問いかけ・情意的サポート）のうち、「傾聴」と「情意的サポート」の実践能力の向上が期待できる。

長くなりましたが、4日間にわたる「教師学一般講座」で、メンタリングの「聴く」に相当する「能動的聞き方」（詳しくは後述）について、私はこんな風に感じました。

- ・ 「能動的聞き方」は、決して「相手の言っていることをただ繰り返すこと」ではない。「相手が伝えようとしていることを、強い意志を持って理解しよう」という心構えから出てくる行為である（それを「心の耳を傾ける」と表現している）。結果として、「沈黙／相づち／促し」や「繰り返し／言い換え」や「気持ちを汲む」という行為が表出するのである。
- ・ 「気持ちを汲む」ためには、ものすごい集中力を持って相手に臨まないといけない。「しっかりと理解できるまで話を聴くぞ」という、明確な意志の継続が必要。

つまりは、相手が発するメッセージ（伝えたいこと）をしっかりと受け止め理解することは、想像以上に難しいことなので、全身全霊を込めて行うべき行為である、というわけです。研修で実際に「能動的聞き方」をしたりされたりしているうちに、「本当に聞いてくれている、という実感って、こんな感じなんだ」と思ったり、しっかりと気持ちを汲んでもらえて「そうそう！私が思っている・感じていることは、まさにそのことなんだ！」という気持ちになったりしました。反対に、「あ、この人は、私をちゃんと理解してくれようとはしていないな」とか「あ、この人は私が言いたいことを先回りして、どう解決策を伝えようかな、なんて考えているみたいだな」とかいう形で、聞き手の心の動きが、少しずつ分かってくるようになりました。これらの経験によって、「『聞き上手』になるということは、うわべだけのスキルを身につけるということとは、イコールではない」ということが、よく分かりました。長くなりましたが、私の現在の結論はこんなところです。

〔いいメンターになるためには、以下の要素が必要不可欠〕

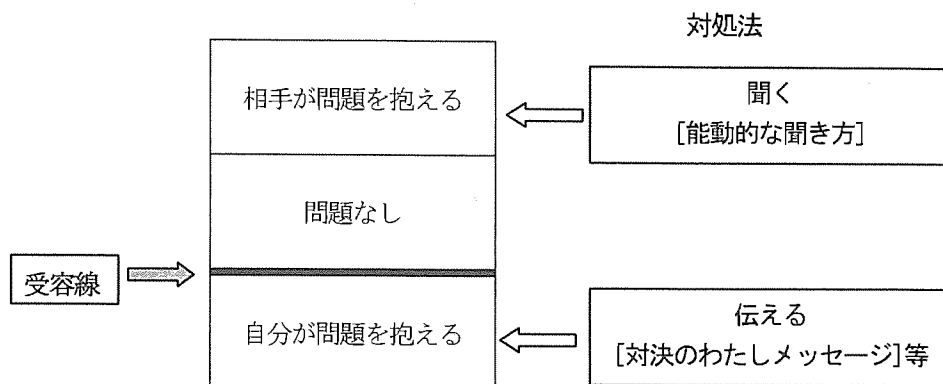
- ・ メンティーのことを、しっかりと理解しようという強い意思の継続
- ・ その意志の表出としての、適切な「聴く」「問いかける」「フィードバックを与える」行為の選択と、その実施

当たり前のような結論になってしまったかもしれませんが、「メンタリングのワザも重要ですが、それを支える気持ち／気合いがないと、ワザを習得してもダメ」と考えています。また同時に、それらの技の習得を目指してトレーニングを積んでいく中で、「気持ち／気合い」の重要性に気づき、それを心の中に持ち続けるよう心がけることも可能だと思います。

その後、本稿の筆者は、職場・プライベートの様々な場面で、親業／教師学での学びを有効活用すべく努力を続けてきた。本研究の「上級日本語：人間関係構築のためのコミュニケーション」も、その延長線上にあるといえる。

2.2 親業／教師学の基本的理念と具体的実施方法

親業／教師学には、「問題の所在を明確にし、それにより最適の対処法を選択し実施する」という基本的理念が存在している。問題の所在は「相手が問題を抱えている」ケースと、「（相手が原因で）自分が問題を抱えている」ケースに大別され、それぞれのケース別に、具体的な対処法が存在している。例として、「能動的な聞き方」と「対決のわたしメッセージ」について、以下述べていく。



「能動的な聞き方」は問題の所有者である相手の気持ちを正確に汲み取ろうとするカウンセリングの技法の一つである。「相手の言ったことを能動的にとらえ、こちらが理解したことを相手に伝えて、その理解が正確かどうかを確認する作業」²であり、大きく分けて、「繰り返す」「言い換える」「気持ちをくむ」の3つの方法がある。例えば、³

子ども：「成績が下がっちゃった。」
 親A：「成績が下がったのね」（くり返し）
 親B：「前より悪くなったのね」（言い換え）
 親C：「がっかりしてるのね」（気持ちをくむ）

このように、能動的聞き方は、ある感情を持っている（問題を抱えている）相手を、聞き手が「そのまま認め受け入れている」ということを伝える方法である。

「対決のわたしメッセージ」は、「相手の行動が、自分の欲求を妨げた、あるいは今妨げている時に、相手にそのことをきちんと伝える」方法⁴であり、以下の3つの要素で構成されている。⁵

- ①自分の感情
- ②相手のどの行動が自分にとって気にかかるのか
- ③その行動が自分にどんな（直接的）影響を与えているのか

この3つの要素を含んだ文、例えば「あなたがお金を返してくれないと（相手の気になる行動）、そのことが気になって仕方がなくて（自分への直接的影響）、不安なんだ（自分の感情）」が、「対決のわたしメッセージ」と呼ばれるものである。⁶

また、「問題なし」の領域でも、「わたしメッセージ」を使うことが可能であり、以下のようなものがある。⁷

〔宣言のわたしメッセージ〕

自分の意見をはっきりと述べるメッセージ。(例、「私は、メールや電話よりも、直接顔を見て話す方が安心します。」)

〔予防のわたしメッセージ〕

関係を壊さないために事前に伝えるメッセージ。(例、「今週末は、出社せずに、研修会に参加したいと思っています。研修会のテーマが、来年度のプロジェクトに関連しているテーマですので。」)

〔肯定のわたしメッセージ〕

相手の行動によって肯定的な感情が起こってきた時に伝える。(例、「家事を手伝ってくれたので、早く終わることができた。とっても嬉しいな。ありがとう。」)

3. 「上級日本語：人間関係構築のためのコミュニケーション」のシラバス

学期初めに、学生に配布したシラバスの内容は、以下のようなものであった。

〔目標〕

人間関係は、コミュニケーションによって成り立っています。より良いコミュニケーションが、より良い人間関係を作っていきます。しかしながら、良いコミュニケーションを実現するための対話は、自然にできるようになるものではなく、様々なスキルを意識的に習得しなければなりません。この授業では、①相手を大切に自分も大切にする方法、②自分のことを的確に伝え相手の話も的確に聞く方法、等を、少しずつ体得していきます。

〔内容〕

授業は、以下のような形で進める予定である。

- ① オリエンテーション
- ② 相手を理解するって、どういうことだろう？：能動的な聞き方（1）
- ③ 大切な人が悩んでいる時の聞き方：能動的な聞き方（2）
- ④ 自分らしさって何だろう？
- ⑤ 本音と建前の使い分けは、必要なのだろうか？
- ⑥ 自分を知るための話し方：宣言のわたしメッセージ
- ⑦ 上手なNOの言い方：返事のわたしメッセージ
- ⑧ 協力を頼みたいときの話し方：予防のわたしメッセージ
- ⑨ 嬉しいことが起きた時の話し方：肯定のわたしメッセージ
- ⑩ 相手と対立した時の解決法（1）：欲求の対立と価値観の対立の区別
- ⑪ 相手と対立した時の解決法（2）：対決のわたしメッセージ（1）
- ⑫ 相手と対立した時の解決法（3）：対決のわたしメッセージ（2）
- ⑬ 相手と対立した時の解決法（4）：価値観の対立の場合
- ⑭ 人間関係を変えるための環境改善法
- ⑮ まとめ

〔教科書〕

近藤千恵(2007)『自分らしく生きる幸せのコミュニケーション：人間関係を変える3つの方法』みくに出版

〔評価〕

出席を含む授業態度(50%)、レポート(50%)による。欠席3回で、自動的に不可となる。遅刻・早退は、2回で欠席1回とみなす。

〔備考〕

コミュニケーションのスキルを体得するには、「実際にやってみること」が必要不可欠です。それ故、授業中の様々な活動に積極的に参加することが、履修者には求められます。加えて、授業外での活動(例、授業で学んだことを教室外で実践してみること、教科書の予習等)も求められます。

4. 結果報告

「上級日本語：人間関係構築のためのコミュニケーション」は、単位取得につながらない授業であり、開講も初めてであったため、何人程度の学生が履修するか、受講生数が当初は心配であった。日本人学生へも参加を呼びかけた結果、留学生10名と日本人学生6名が第1回目の授業に集まった。学期が進むにしたがって、留学生は徐々に減り始め、最終的には4名になった。日本人学生は出入りが激しく、学期を通した延べ人数にすると10名ほどが参加したのであるが、最終的には2名の参加で落ち着いた。最後まで参加した6名の受講生のうち5名が、最終レポートを提出した。レポートでは、「①難しかったことは何か、それはなぜか」「②授業で学んだことは、これからの生活に役に立つ／立たないと思うか、それはなぜか」「③授業の進め方についての要望」「④その他の感想や意見」について記述するよう指示が出された。以下、同レポートに記された内容に基づき分析していく。

4.1 難しかったこと

4名中3名の留学生が「能動的な聞き方」が難しかったとコメントしていた。

留学生A

能動的な聞き方が、私にとって一番難しかったです。特に難しかったのが、自分のアドバイスを主張しないで、相手に言わせる点です。一般的に、友達から相談を受けたら、人の中には「自分は信用されている」という気持ちが生じます。それで、相手のために、または自分の言いたい欲望を満たすために、どんどん自分から意見を言うばかりになってしまいます。「私の言うとおりにすればいい」という気持ちもあるかもしれません。能動的な聞き方は相手の言ったことを繰り返したり、言い換えたりするパターンなので、「ちゃんと聞いてない」と相手に思われるかもしれません。加えて、聞き手が相手の気持ちを代弁するのも、ちょっと偉そうな感じもしてしまいます。そんなことを考えてしまい、授業の最初のころ、能動的な聞き方はうまくまねできないだけでなく、納得できないと思っていました。勉強していくうちに、能動的な聞き方は、相手の気持ちを落ち着かせることができる気がしてきました。落ち着いたあとであれば、相手は自分の気持ちについて、ちゃんと話せるのです。そうは思いますが、やっぱり能動的な聞き方は難しいです。

留学生B

能動的な聞き方は先生の授業で初めて知った。その時の「難しいな」という感じ、今でも持っている。「繰り返す—言い換える—気持ちを汲む」というやり方は、なんとなく面倒くさいと思った。…その後、返事のわたしメッセージや、予防のわたしメッセージや、対決のわたしメッセージを行う時に、すべて能動的な聞き方を使わなければならないことを知った。練習していると、いつも、能動的な聞き方のやり方を間違ってしまうし、全く使うのを忘れることもあった。

留学生C

今学期の授業は全般的に難しかったと思う。母国の大学でも、まったく触れたこともなかった内容で、新しく面白かったが、次第に真面目に復習することができなくなり、もう一つ理解できないまま、次の部分に移ってしまった。特に、能動的な聞き方は、使える機会は多かったが、慣れてないため、以前の習慣が出てしまい、成功したことがない。しかし、やは

り最も難しかったのは、授業内容ではなく、自分をコントロールすることだと思う。

それに対し、日本人学生は、能動的聞き方よりもわたしメッセージが難しい、と述べていた。

日本人学生

私は「わたしメッセージ」を使うことが難しかったです。能動的な聞き方は、練習する中でだんだん使えるようになっていきました。相手が言うことに対してそれを繰り返したり、言い換えて繰り返したりして、話し手を受け入れようとすることもできるようになりました。しかし、わたしメッセージを伝えることはまだ難しいです。何をどう伝えていいかが話しているうちに分からなくなってきました。はじめからこれを言うんだ！というのを作っておいても実際はそのシミュレート通りにはいきません。能動的な聞き方をしている間、相手が話している間に、最適なわたしメッセージを考えてそれを伝えるというのが一番難しかったです。

「難しい原因は自分の日本語力にある」と述べた留学生が2名いた。

留学生D

授業でロールプレーをやることが難しかったと思います。やはり自分の日本語能力が不足していると思います。自分が考えてることをうまく相手に伝えられないし、両国の文化の違いもあるために、自然には話し言葉も出てきません。

留学生B

能動的な聞き方のほかに、難しく思うのは対決のわたしメッセージである。相手の受け入れられない行動には非難がましい言葉を使ってしまうがちである。それは間違いと分かりながら、知らないうちに使ってしまった。また、自分への具体的な影響と正直な感情を言っても、相手に納得がしてくれなければ、それまでだ。その原因の一部は、自分の話し言葉がへたなことにある。特に、「よ」、「ね」、「わ」のような終助詞をうまく使えない。

4.2 授業で学んだことは役に立つか

受講生全員が、「授業で学んだことは役に立つ」と述べていた。

留学生A

授業で学んだことは、これからの生活に役立つと思います。印象に残ったのは「肯定のわたしメッセージ」です。相手を褒めるのではなくて、自分の気持ちを表すだけです。相手を喜ばそうとするのではなくて、自分の考えを素直に言うだけです。言った方も言われた方も、いい気分になります。

留学生C

役に立つと思う。授業で学んだのは、ありのままの自分を大切にしながらも、いい人間関係を作っていく方法であり、しっかり勉強して、自由に使いこなせるようになりたいと思う。

留学生D

役に立つと思います。授業を通じて、同じことなのに違う話し方を使えば、全然違う効果が出るということが分かりました。日常生活ではまだうまく使えませんが、上手な話し方が身につくよう、頑張りたいと思います。

日本人学生

この授業で学んだことは役に立つと思います。その中でも特に能動的な聞き方が他のよりかは簡単で、効果的だと思います。なぜなら、能動的聞き方をされると実際に話しやすかったという体験からです。私には意識的にか無意識的にかは分からないけれども能動的な聞き方ができる先輩がいます。その人に相談を持ちかけると、本当に授業のお手本のような感じでこっちからどんどん喋って、解決策も自分で見つけてしまいます。今まではその人がしている

ことが能動的な聞き方ということは知らなかったけれども、この授業でそれを学び、自分も使えるようになりたいと思いました。

学んだことは役立つものの、同国人同士だと困難であると述べた留学生が1名いた。

留学生B

授業から学んだことはこれからの生活に役に立てることは言うまでもない。いい勉強になった。日本人の友達と雑談する時には、もうかなり使えるようになった。しかし、同じ国の親友の場合は、やはり使えない。文化と言語の違いがあるからかもしれない。

4.3 授業の進め方についての要望

日本人学生と留学生1名が、日本語の使い方についての助言が欲しかったと述べていた。

日本人学生

自分たちで練習しているときに、行き詰まることが多いのもう少しアドバイスを多めに欲しいです。

留学生C

自由に話せるのはいいが、上級とはいえ、日本語はまだまだなので、話し方などのコメントがほしい。

留学生2名が、教科書の活用方法について、意見を述べていた。

留学生A

予習として、教科書を読む以外の宿題がほしいです。学生はみんな、予習をあまりしないで、教科書を読むのが授業中だけになっています。予習と復習は、私はほとんどしていません。しなければならない宿題を与えてもらいたいです。

留学生D

今の授業の進め方はいいと思いますけど、教材が十分に利用できなかったのは残念だったと思います。高く、これからの人生にも役に立つかもしれない教材をせっかく買ったのに... @*@ (冗談~あんまり気にしないでいいです。)

4.4 その他の感想や意見

留学生3名が、学期途中での受講生の減少について言及していた。

留学生A

こういったコミュニケーションの仕方を学ぶ授業だから、学生数はちょっと少ないと思います。学生が少ないので、話題を広げることができないこともあったと思います。

留学生B

授業の後半、学生がだんだん減ってきた。みんな寂しかっただろう。先生の授業は単位さえあれば、その状況の改善ができたのと思う。来学期の授業にも興味を持っているが、単位がもらえないので、迷っている。なぜなら、先生の授業を選べば、同じ時間の他の単位のとれる授業をあきらめるしかないから。難しい選択だ。

留学生C

留学生向けの授業とは思えないぐらい、レベルも高く、新鮮な授業だった。ただ、やはり、単位が取れないという事で、欠席者が多くなったのが、残念だった。

授業中、集中力を保つのが難しかったと述べた留学生が1名いた。

留学生D

授業のとき、ときどきやる気がないことに気づきました。もちろん、これは自分のせいだということは分かっていますが、先生の留学経験とかの話聞いてるときは、すごく興味を持って、集中できていたと思います。だから、授業を進めながら、いろんな面白い話をもっとしてくれれば、見聞が広められるし、学生さんたちももっと集中できるかもしれないと思います。

日本人学生は、以下のように述べていた。

日本人学生

普段は専門の授業が中心なので、このような教育的な授業は非常に興味がありおもしろかったです。始めはどういう授業か分からなかったけれども、3回目くらいで能動的な聞き方について「すごい！」と思い、引き込まれていきました。しかし、内容自体は頭で理解できても、実際にやってみると本当に難しかったです。まだ能動的な聞き方が少しできるくらいで、他はほとんどできません。でもできるようになったら、そのことで人間関係がもっとスムーズにいくよう気がします。私は来年度一年間〇〇に留学に行きます。そして帰ってきたらまたこのような授業を受けて、もっともっと練習してできるようになりたいです。

4.5 結果のまとめ

わずか5名のレポートに基づく分析ではあるが、以上の結果は、次のようにまとめられるであろう。

- ・「能動的な聞き方」を難しいと感じる留学生が多い。
- ・日本人は「わたしメッセージ」を難しいと感じている。
- ・日本語力の不足が原因で、困難を覚える留学生がいる。
- ・授業で学んだことは役に立つと感じられているが、相手によっては使えない／使いにくいと感じるケースが存在している（例、同国人同士）
- ・授業中、より積極的な教師の助言が求められている。
- ・教科書の活用方法について、改善の必要性がある。
- ・学期途中での受講生の減少が、解決すべき問題として存在している。

授業のデザイナー及び実施者として、「授業中の教師の助言」「教科書の活用方法」「受講生の減少への対処法」に関する具体的改善策を次回は講じた上で、授業に臨みたいと思う。

5. おわりに

前掲の「教師学一般講座」「教師学基礎講座（保育編）」「親業一般講座」に参加する度に、「外国人に対する日本語教育の現場での実践報告はありませんか」という問いを、様々な方にしてしたが、「自分の知っている限りでは存在しない」という回答ばかりを得ていた。その時の状況が変わっていないのであれば、本研究は、親業／教師学を日本語教育分野に応用した、パイオニア的研究という位置づけになる。⁸結果として、「日本語力の不足が原因で、困難を感じる」「『わたしメッセージ』を伝える時の終助詞の使い方に迷う」「日本人とはうまく使えるが、同国人同士では使いにくく感じる」などの、興味深いデータも散見された。来年度の開講にあたっては、今回見えてきた改善点を踏まえ、より良い授業の提供に努めていきたい。

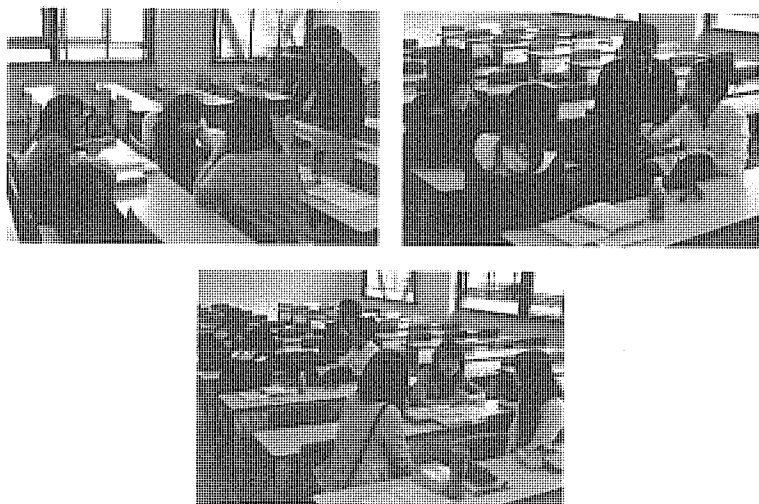
注

- (1) 本稿の筆者は、『オンラインによる教師教育者研修：海外日本語教育実習担当者を対象として』の中で、メンターとしての筆者自身の試行錯誤を「メンター日記」という形でまとめている。詳しくは横溝他（2009）を参照。
- (2) 近藤（2007：58）より。
- (3) 土岐（2006：97）より。
- (4) 相手の行動が自分に直接的な影響を与えるものではないときの対立は「価値観の対立」と呼ばれる。詳しくは、近藤（2007）を参照。
- (5) 近藤（2007：121-122）より。
- (6) 近藤（2007）は、相手の依頼・要求を断る方法として、「返事のわたしメッセージ」を紹介している。「返事のわたしメッセージ」は、相手の要求と自分の要求が対立している点が、「対決のわたしメッセージ」と共通している。
- (7) 高瀬（2000：89-90）より。
- (8) 吉本（2007）は、「対立解消プログラム」を日本語上級クラスに導入した実践報告を行っている。

参考文献

- (1) 久保まゆみ（2005）『親業トレーニング』駿河台出版社

- (2) トマス・ゴードン (1990) 『親業・ゴードン博士 自立心を育てるしつけ』近藤千恵
訳、小学館
- (3) 近藤千恵 (2007) 『自分らしく生きる幸せのコミュニケーションー人間関係を変える
3つの方法』みくに出版
- (4) 高瀬利雄 (2000) 『先生のためのやさしい教師学による対応法：生徒への対応が楽に
なる』ほんの森出版
- (5) 土岐圭子 (2006) 『教師学入門：教師のためのコミュニケーション論』みくに出版
- (6) 日本語教育学会教師研修委員会編 (2004) 『オンライン教師研修の可能性の探究』日
本語教育学会
- (7) 諸富祥彦 (1997) 『カール・ロジャーズ入門ー自分が“自分”になるということー』
コスモス・ライブラリー
- (8) 横溝紳一郎 (1997) 「私の一冊 横溝紳一郎先生が選んだ『T. E. T. 教師学ー効果的な
教師＝生徒関係の確立』」『月刊日本語』8月号、93.
- (9) 横溝紳一郎・迫田久美子・森千枝見・吉村敦美・青木香澄・大西貴世子・田場早苗・
森井賀与子・家根橋伸子・レイン斉藤幸代 (2006) 「教師教育者を養成する日本語教
育実習：メンター育成コースでの試みを通じて」春原憲一郎・横溝紳一郎編著『日本
語教師の成長と自己研修：新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』凡人社、
244-266.
- (10) 横溝紳一郎・岡部悦子・高橋美奈子・山田智久 (2006) 『オンラインによる日本語教
師教育者研修に関する総合的研究』（平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金萌
芽研究課題番号 16652038）研究成果報告書
- (11) 横溝紳一郎・岡部悦子・高橋美奈子・蒔苗亜美・山田智久・吉村敦子 (2009) 『オン
ラインによる教師教育者研修：海外日本語教育実習担当者を対象として』（平成 18
年度～平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 18520411）研究成果報告
書
- (12) 吉本恵子 (2007) 「協働的な学習を可能にする教室環境の改善：日本語上級クラスへ
の対立解消プログラムの導入・展開とその効果」『2007 年度日本語教育学会春季大会
予稿集』、153-158.
- (13) Gordon, Thomas. (1974) T.E.T.: *Teacher Effectiveness Training*. New York: Wyden.



授業風景

(2009 年 12 月 3 日撮影)

(佐賀大学留学生センター教授)